

「住職の信仰・牧師の希望」

箴言 3 章 5～6 節

聖学院キリスト教センター主事 久保哲哉

2019年8月に復興ボランティアチーム SAVE の活動で岩手県釜石市に訪れた際、ある寺院にて尊敬すべき住職と出会いました。神を信じるか、仏を信じるかは違いますが「本物」と出会うと、学ぶことが多いことを実感します。

釜石市は東日本大震災が起こった際、津波で多くの命が失われましたが、住職は率先して寺を避難所として解放し、たくさんの人々を助けてくれました。また、現地の中学校の体育館が遺体安置所になり、体育館に約 1100 体の遺体が運び込まれた際にも、住職はまっ先にお経をあげに行き、身元確認をして回った。そのような方です。地元の住職ですから、命を失った方々の多くは知り合いであったことでしょう。この体験がきっかけで住職は PTSD となり、心臓がこれまでに2度も停止したとのこと。それでもなお、命をかけて当時の話をしてくださる姿は圧巻でした。住職の次のような言葉が心に残っています。記憶を頼りにした引用ですが「人々の死が日常となった中、半数が茫然自失となっていた」「その中でわずかな人が手伝いをしてくれた」、手伝いをしてくれたのは「仏壇に手を合わす習慣をもっていた人だった」とのことです。これはキリスト教の発想でいえば、「礼拝する習慣」「祈る習慣」と言い換えてよいでしょう。また、住職は「信仰の深い浅いは関係ない」が「信仰がなければ何もできない」「信仰がなければ心を失う」とも語りました。

「信仰がなければ何もできない」

「信仰がなければ心を失う」

これは本当のことだと思いました。というのも、住職の体験とは次元は違うのですけれども、私も「何もできなくなったこと」がありました。皆さんと同じ大学生時代「心を失った」ことがあるのです。それは大学4年の頃「就職活動」に直面したときのことで、

学生のみなさん「自分はいったい何者なのか」「何ができて、何ができないのか」を3年生の後半ぐらいまでにしっかり考えてくださいね。私は、恥ずかしながら、大学生であった当時、サークル活動とアルバイトに熱心になるあまり、4年生になってから「自分が何者なのか」を考え始めたのですが、ときすでに遅し。自分は何がしたいのかを見つけることができずに、結局年が明けてしまいました。あと2か月で卒業というときのことで、

わたしのことを心配してくれた先輩から食事に誘われ「君は働く気があるか」と問われました。もし働く気があるなら就職先を紹介してくれるというのです。渡りに船のはずでしたが、「せっかくですが、結構

です」と答えました。なぜ断ってしまったのか、自分でもよくわかりませんでした。すると先輩に「お前何がしたいんだ」と問われました。そのときにわたしは「伝道したい」と答えました。つまり「牧師になりたい」と答えてしまったのです。

自分の口から出たその言葉に驚きました。牧師は聖なる存在で、博学なイメージがありましたが、自分は何も知りませんし、自己中心的な普通の人間です。今考えると、自分自身で「牧師になりたい」という願いを封印していたのだと思います。心の思いを言葉にして初めて気づくということがあることを、そのときに知りました。

しかしながら、自分が何者かを考えれば考えるほど、自分の思い描く牧師と自分自身とは正反対の人間であることだけが見えてきます。当時は自分が語ってしまった言葉を不思議に思いながら、とにかく神に祈りました。すると、間が悪いことに「礼拝で証(メッセージ)をしてください」との依頼がありました。自分自身の行くべき道が見えていないのに、語るべき言葉が見つかるはずはないのです。何も言葉が浮かんでこないのも、とりあえず讃美歌を決めよう。と讃美歌をぱっと開くと、1編の 291 番が目飛び込んできました。次のような歌詞です。

主にまかせよ、汝が身を、
主はよろこび 助けまさん。
なやみは つよくとも
み恵みには 勝つを得じ。
まことなる 主の手に
ただまかせよ、汝が身を

あまりに現在の自分と重なる歌詞でしたから、この讃美歌はどの聖書の箇所が歌われているのか気になりました。それで調べてみると、本日の聖書箇所である箴言3章5～6節だったのです。もう一度お読みしましょう。

「心を尽くして主に信頼し、自分の分別には頼らず
常に主を覚えてあなたの道を歩け。そうすれば
主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる。(箴言3章5～6節)」

「自分の分別」では牧師になることなど、有り得ない選択でしたけれども「心を尽くして主に信頼し」「常に主を覚えてあなたの道を歩く」ならば、「主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる」と信じて、始めの一步を踏み出しました。住職は「信仰がなければ何もできない」「信仰がなければ心を失う」と語りましたが、主への信頼と信仰、つまり主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださるという希望に気づいたとき、「失っていた心」を取り戻し、何もできなくて右往左往していた者の道筋が、本当にまっすぐにされるという経験をしました。

人生には先が見えずに落ち込むようなことが様々あります。将来のこと。友達関係のこと。勉強のこ

と等々。人生は心が右往左往してしまうことが度々あります。しかしながら、主に信頼して、聖書に照らされた道をゆくなれば、神は道を、未来を開いてくださる。この信仰があれば何でもできるのです。心を取り戻すことができるのです。信じる神は違えども、住職と牧師の「信仰」と「希望」が重なった瞬間に、あらためて聖書の言葉が心に響いたのでした。この大学生活の中で、皆さんの心にも響く聖書の言葉が与えられますように。

天の父なる神様、あなたの御名をたたえます。

本当にあなたのみことばは、我が足のともしび、我が道の光です。どうか、悩みるとき、あなたに信頼する者の道筋をまっすぐにしてください。一人でも多くの者たちが、特に困難を抱える者たちがあなたの言葉と出会い、心に光が注がれますように。愛する主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

2019年10月18日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「心に響く聖書の言葉」